

幼児教育におけるESDの意義と可能性：
ユネスコスクールの実践の検討

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田宮, 縁 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009533

幼児教育における ESD の意義と可能性

～ユネスコスクールの実践の検討～

A Case Study of Early Childhood Education Based on ESD : Significance and Prospects

田 宮 縁

Yukari TAMIYA

（平成 27 年 10 月 1 日受理）

1. 緒言

現場への浸透は定かではないが、「持続可能な社会の構築」は、すでに現行の学習指導要領にも扱われている⁽¹⁾。さらに、ESDの理念は、次期学習指導要領では、「アクティブ・ラーニング」等の学習方法を用いながら、「21世紀型能力」⁽²⁾を本格的に身につけていくために教育の基本軸になるといわれている⁽³⁾。

ここで、ESDについて確認をしておきたい。ESDとは、Education for Sustainable Developmentの略で日本ユネスコ国内委員会では、「持続可能な開発のための教育」と訳している。環境、貧困、人権、平和、開発といった様々な問題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組む（think globally, act locally）ことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動であり、ESDは持続可能な社会づくりの担い手を育む教育としている。さらに、関連する様々な分野を「持続可能な社会の構築」の観点からつなげ、総合的に取り組むことを重視している。そこでは、「他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、『関わり』、『つながり』を尊重できる個人を育むこと」をめざしている⁽⁴⁾。

幼児教育では、「持続可能な社会の構築」という文言は使用していないものの、従前より、ESDの理念との共通性を見出すことができる。例えば、①「総合性」：遊びは自発的な活動であるとともに総合的なものであるという点である。幼児教育は「環境を通して行うこと」を基本おしており、そこでは、遊びを通して総合的に指導⁽⁵⁾することを重視している。②「関係性」：環境との関係性、活動と活動との関係性という点である。身近な人、もの、自然環境、社会事象などのかかわりや活動と活動のストーリー性を重視している。③「行動変容」：心情・意欲を表す子どもの態度の育成をめざしている点である。各領域⁽⁶⁾の「ねらい」には、就学までに育てほしい生きる力の基礎となる心情・意欲・態度などが示されている。ここでいう態度とは形式的な行儀作法ではなく、心情・意欲を表す子どもの行動、つまり行動変容をめざしている。

さらに、環境を通して行う教育は、「幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開」されていくことを重視しており、「幼児の自発的な活動としての遊び」を通して各領域のねらいを総合的に指導していくものである。また、幼稚園教育要領では、「幼児の自発的

な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習である」と述べられている⁽⁷⁾。つまり、幼児教育は、次期学習指導要領改訂の方法として注目されている「アクティブ・ラーニング」を日常的に実践しているということである。

以上のように、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（以下、「幼稚園教育要領等」）に基づく、保育を実践することが、ESDの理念に通じるものであり、また、究極のアクティブ・ラーニングという方法で教育を行っているのである。しかし、ESDを推進するパイロット校であるユネスコスクールに加盟している幼稚園は23園と小学校の489校（2015年6月）⁽⁸⁾と比較して少数に限られている。

井上（2008）の調査によると、「持続可能な開発のための教育（ESD）」について知っているかという問いに対して、幼稚園教員研修担当の回答部署の85.7%が、保育士研修担当の回答部署の75.0%が「全く知らない」または「ほとんど知らない」と回答しており⁽⁹⁾、幼児教育の現場では、ESDの理念が浸透しているとは言いがたい。さらに、2014年10月国立教育政策研究所教育課程研究センター発行の『環境教育指導資料』に幼稚園における実践事例が2例掲載されている⁽¹⁰⁾が、ESDの実践報告は限られており、十分な検討がなされているとは考えにくい。

そこで、本論では、2015年2月にユネスコスクールに加盟したこども園の一つのプロジェクトの記録をもとに、「21世紀型能力」の基礎となるよう幼児期の学びを「基礎力」「思考力」「実践力」の観点⁽¹¹⁾から考察し、幼児教育におけるESDの意義と可能性について検討していく。

2. ユネスコスクールの実践

(1) 対象園の概要

1) 対象園：静岡市立由比幼稚園（2015年度より由比こども園）

2) 組織：3歳児16名 4歳児23名 5歳児13名（2014年度）

園長1名、保育教諭6名、事務職員1名

3) 教育目標

「にこにこえがおのげんきな子～夢中になって遊ぶ子・心豊かな子・元気な子～」

(2) 地域の概況

対象園の位置する由比地区は、2008年の静岡市との合併までは、人口は9000人程の小さな地域であったが、「由比町」として独自の文化を形成してきた。当地は、「東海道」を有しており、由比本陣、由井正雪生家など歴史的な資源も豊富な上、地域の14の寺院が文化の中心となっている。また、代々駿河雛人形の製作に携わる人形店もあり伝統工芸も盛んな地域である。

地勢的には、南に駿河湾、北に山々があり、自然豊かな地域である。また、教育熱心な地域の人々から、幼稚園をはじめ学校教育に対する支援を惜しまない。

(3) プロジェクトの実施（ユネスコスクール加盟申請書より抜粋）

全園ESDテーマ「地域の人・文化・歴史に誇りをもち、世界にひらく眼を育成する保育」

対象：全園児

①目的：地域の人とのつながり、文化や歴史とのつながりのなかで生活することの充実感を味わい、誇りや自信を行動するとともに、海外にも興味や関心をもつ。

②実施計画

表1 3つのプロジェクトの概要

	プロジェクトA	プロジェクトB	プロジェクトC
4月	花祭り	望月人形訪問 端午の節句	清水港見学 ALTによる英語遊び 由比漁港への散歩
3月	座禅・説法 由比本陣・由比正雪生家 菅原天神初詣	望月人形訪問 桃の節句	
地域の人・文化・歴史に誇りをもち、世界にひらく目を育成する保育			

〔プロジェクトA〕文化財に関する体験活動

地域にある14の寺院は連携を図りながら、住職が地域の幼稚園や保育所に訪問したり、子どもたちを招いたりする機会を計画的に実施している。4月には、花御堂や幼仏像、甘茶を住職が用意し、園内で花祭りを行う。子どもたちは、日常生活では縁の薄い、お釈迦様と出会う機会となる。また、寺院に子どもたちが出向き、座禅を組んだり、説教を聞いたりする機会も設けている。住職の話は、子どもにもわかりやすく心の育ちに欠かせないものとなっている。このように地域の人とのかかわりのなかで、園内での規範意識の醸成だけでなく、地域が一体となって教育にあたっている。

また、当地区は、東海道沿いに江戸時代の面影を残す場所が数多く存在する。なかでも公園として整備されている由比本陣では、芝生で体を使って思い切って遊び、由比本陣について親しみと愛着をもつ。小学校での地域学習の際には、子どもたちの身近な環境として由比本陣、由比正雪生家とかかわることとなると思われる。

さらに、1000年以上の歴史をもつ菅原神社に、全員で初詣に行く。やがて由比で育った子どもは、中学生になると合格祈願に全員で菅原神社を参拝する。このような体験の積み重ねが、文化財の歴史を知り、愛着を深めていく契機となる。

〔プロジェクトB〕伝統工芸士とのかかわり

端午の節句、桃の節句の時期には、代々駿河雛人形の製作に携わる伝統工芸士（望月人形）を訪問し、節句の由来や人形を飾る意味などを繰り返し聞きに行く（5歳児）。そして、園内で節句の準備（人形を作る、人形を飾る、花を飾る、歌をうたうなど）を行い、当日は柏餅を食べたりするなどお祝いをする。このように地域の専門家と連携を図りながら、本物に触れることを通して質の高い保育を実践している。


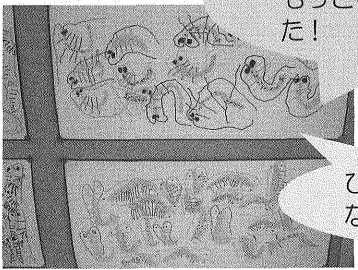
2013年度は、雛人形協会から本園へ五月人形の贈呈があり、4月に、5歳児が電車にのり、静岡市役所で行われる贈呈式に出席した。望月人形を通して本園に届けられた五月人形を見た幼児は、兜の竜が握っている玉に興味を示した。搬入してくれた望月人形の方が、幼児に願いが叶う玉との説明を加えてくださり、幼児の竜の握っている玉への思いが高まった。10月の運動会では竜の舞を踊るなど、その後の生活の節目ごとに、成長と重ねあわせ、竜の握っている

玉への思いをつなげていった。

〔プロジェクトC〕世界にひらく眼の育成

園内では、ALT訪問時、英語を使って遊んだり、世界にはいろいろなくにがあることを知ったりする活動を行った。5月には、清水港（国際港）の見学、海外に向けて出向するにつぼん丸を見送るなどの活動も行い、2013年度の運動会の前には、万国旗に興味をもち、万国旗作りも行った。その中で、ブータンの国旗に竜が描かれていることを発見し、運動会での竜の舞への思いを高めていった。また、散歩で、由比漁港に行き、漁港を見学したり、船上より由比の町を見たり、特産品である桜えびを使ったドーナツを地元の人に作ってもらい食したりするなど、人の営みに触れ、自分の住んでいる町を外から見るという体験を日常的に行っている。このような活動を通して、世界にひらく眼の基礎を培っている。

(4) プロジェクトC 2014年度の実践（年長児）と考察

担任による記録（下線は筆者が加筆）	考察
<p>①桜えびが由比こども園にやってきた！（4月）</p> <p>由比漁協青年部のご厚意で、“桜えびロケット”がここ数年、こども園に届けられている。子どもたちは、「びよんびよん動いてる。」「ひげが長いね。」等と、興味津々でロケットを覗き込んでいた。</p> <p>漁師さんから、元気な桜えびは透明であること、ひげが切れると死んでしまうこと、足のように見えるのは、触覚であること等を教えていただき、<u>子どもたちの目がキラキラ輝いていた。</u></p>  <p>もじよもじよしてて、なんかかわいいねえ…</p> <p>ひげがながいと こんがらがっちゃうよ</p> <p>桜えびを身近に感じた子どもたちは、その後、クラスにて様々な画材を用いて製作を楽しんだ。<u>給食にかき揚げ等が出たときには、「由比でとれたえびなんだよね。」と、喜んで口にする様子が見られた。「由比の海には、もっとたくさん魚がいるのかな？」と関心をもち始める子どももいた。</u></p>  <p>ロケットのなかにもっといっぱいおよいでた！</p> <p>ひげは からだよりながかったよね</p>	<p>基礎力：言語スキル、数量スキル</p> <p>「びよんびよん動いてる」「ひげが長いね」等と発話から、店頭に並べられている桜えびと生きている桜えびを比較し、印象を言葉で表現している。子どもたちは、ヒゲを桜えびの「生と死」の象徴として捉えており、後の遊びや活動の中心となる。</p> <p>子どもたちの目の輝きは、桜えびの生や不思議な動きを真剣に受け止めている（認識する）姿と捉えてよいだろう。</p> <p>「もじよもじよしている」という動きや「こんがらがっちゃう」というヒゲに注目した発話からは、観察の深まりを読み取ることができる。</p> <p>その後、桜えびを食すという五感をフルに活用した活動に発展する。子どもたちは、命をいただくといくという営みを体験を通して実感していく。ここで「もっとたくさん魚がいるのかな」という桜えび以外の魚にも関心は拡張していく。</p> <p>基礎力：言語スキル、数量スキル</p> <p>桜えびの生態や動きなど個々の学びを「絵画表現」、「身体表現」で振り返る。「絵画表現」では、「いっぱい」「ひげはからだより長い」など量や長さの比較など観察したことを発話とともに絵で書き表している。</p>

②海の向こうには何がある？（5月～6月）

子どもたちの、海への興味をさらに膨らめるきっかけとなったのが、5月に行った清水港での客船見送りである。大きな船を目にして、「由比の船（漁船）よりも大きい!」と、自分たちが暮らす町との違いも感じていた。また目の前に広がる大海原を前にして「これが駿河の海かあ…。向こうには何があるのかな?」と、園歌に出てくる歌詞を思い出し、いつか遠くの国へ行ってみたいという期待に胸を躍らせていた。



♪するがの うみの
むこうには～♪
園歌を自然と歌いだす

その後、由比漁港を訪れると、漁船の整備をしている漁師さんと出会った。漁で使う道具を整理している姿を見て、「あれでえびをとるのかな?」、「アジも由比の魚でしょ」、「この漁師さんたちがとってきてくれるんだよね」、「おじさん、そのあみで、なにをとるの? さかな?」と、地元の漁師さんに対する憧れの気持ちも見られた。

漁港からの帰り道、由比桜えび通りに並ぶお店の前を通りながら、釜揚げしらすのいい香りを嗅いだり、伊達巻屋さんや蒲鉾屋さんとお話をしたりした。ちょっとしたお散歩でも、“由比”を感じる事ができ、子どもたちにとって由比がぐっと身近になっているのを感じた。

③海って、おもしろいね！（9月～10月）

体を動かすのが気持ちよくなってきた2学期。様々な運動遊びを楽しむ中で、保育者は、“友達と気持ちを合わせる心地よさを感じること”と、“由比や海をさらに身近に感じること”を願った。そこで、数年前に地域の方からいただいた大漁旗を活用することにした。自分一人の力では持ち上げることができない大漁旗。友達と「いっせーの一で!」と声をかけ合って思い切り旗を持ち上げる。すると色とりどりの大きな旗が、バルーンのようにふくらみ、応援席から歓声が上がった。みんなで声や動きをそろえたときの満足感をどの子も味わい、すがすがしい笑顔が輝いていた。

基礎力：言語スキル、数量スキル

清水港への園外保育は、公共交通機関（電車、バス）の利用という点でも幼児期に必要な体験がなされている。また、由比港の漁船と船の大きさの比較や町並みの違いについての気づきは、科学的な思考の芽生えと捉えることができる。

思考力：発見力

駿河湾をみた子どもは、当園の園歌の歌詞と目の海と関連づけ、歌いだす。子どもにとっては、日常的に歌っている歌の意味を実感した発見の瞬間なのではないだろうか。

思考力：適応的学習力

実践力：人間関係形成力

ロケット桜えびを持ってきてくれた漁師さんとの交流、清水港での客船をみた子どもたちは、由比漁港に停泊している漁船や漁師に興味を示す。経験から得た知識をもとに予想を試してみたり、新たな疑問が生じたりするなど、地元の漁師さんに親しみをもち交流する。また、由比の商店街でも心地よい香りを感じながら、商店の人たちとの交流がみられた。このような交流が地元への愛着を醸成する。

思考力：応用

保育者の柔軟な発想で、運動会で使用するバルーンの代わりに大漁旗が使用された。子どもの達成感、また保護者や地元の方の歓喜が記録から読み取ることができる。

環境を通して行う教育を実践している園では、運動会は単に戸外で体を動かすことにとどまらず、年度の前半での遊びや活動のなかで学んできたことを総合的にまとめる機会となる。子どもの遊びや活動のテーマを中心に構成され、高等学校の「文化祭」的なイメージと類似しており、子どもに



としては発達の節目となる大きな行事である。

子どもが作成した「ゆいっこの旗」にも桜えびの命の象徴である長いひげがたくさん描かれている。



はたの したにもぐると
すごく おもしろいんだよ!

ゆいっこの旗
ゆいには えびちゃんが
いっぱいだから、
いっぱい かきた〜い!

④水族館を作ろうよ! (10月)

海がテーマの運動会を楽しんだ後、クラスでの話し合いの中で、みんなで水族館を作りたいという考えが出た。それを聞いた友達は、使う材料や大きさ等のアイデアを次々に伝え合っていた。保育者は子ども同士のやりとりに丁寧に耳を傾け、ホワイトボードに絵を描きながら、どんなものを作りたいのかクラスで共通のイメージをもっていった。

思考力：問題発見解決力、創造力

実践力：自律的活動力、人間関係形成力



ホワイトボードに魚の絵

うしろに さめを
かいちゃえ〜! まで〜!

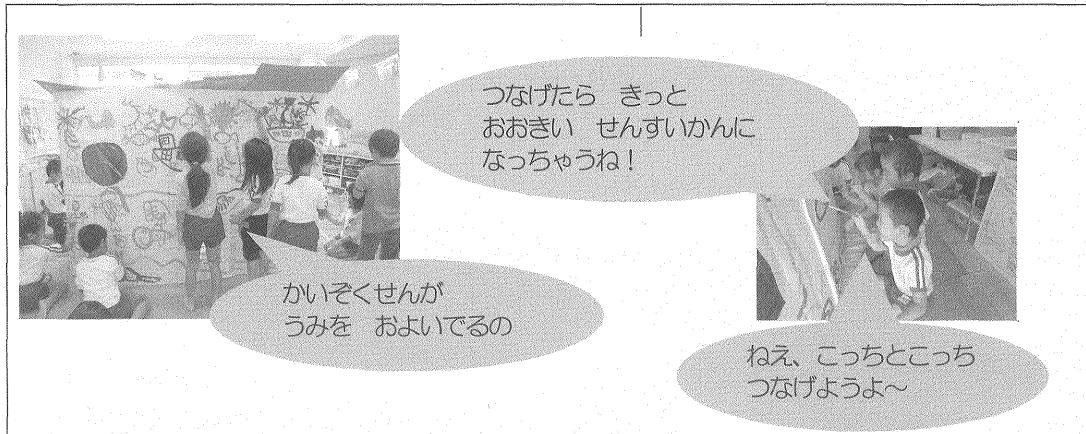
わたしの たこと
せんせいの たこが
おいかけてこしてるみたい!

みんなで水族館をつくりたいという一人の子どもの発想が、クラス全員で共通の目的となる。その問題を解決していくために、経験をもとにそれぞれの子どものアイデアを出し合う、保育者がそれらをホワイトボードに可視化し、イメージを共有のものにしていく。

保育者が書き始めたホワイトボードに子ども絵を描き加え、アイデアを膨らめていく様子が発話から読み取ることができる。

子どもが動き出したら、子どもに任せるといふ保育者の適切な援助により、子どもの主体性を引き出している。遊びの主体が子どもに移り、子ども自身が遊びの主人公となり、自律的活動力が発揮されている。また、共同製作のなかでは、仲間とのかかわりも必然的に生じる。

そうして作り上げた水族館は13人の子どもと保育者が入れるほどの大きさになった。これまで経験したこと、見たものをもとに、一人一人が絵筆を持って真っ白な壁面にのびのびと海中の絵を描いていった。特に、保育者から「海の絵を描きましょう」とは言わなかったのだが、子どもたちの中には「水族館=海」という気持ちが自然と湧き出てきたように思われた。



かいぞくせんが
うみを およいでるの

つなげたら きっと
おおきい せんすいかんに
なっちゃうね!

ねえ、こっちとこっち
つなげようよ〜

⑤船を作るぞ！（11月～12月上旬）

友達と力を合わせて水族館を完成させた後、「海、作りたいな…」という呟いた男児がいた。この頃になると海が大変身近な存在となっており、「海かあ。どうやって作る?」「部屋の床を水色にしないとね。」と、思いはどんどん膨らんでいった。

水族館よりも大きな一つのテーマ“船”がクラスの中で明確になった。友達と共通の目的を見出し、実現する喜びを味わう過程を十分楽しんでほしいと考え、保育者は船の設計図をまず作ることを提案した。絵筆を持つと、子どもの思いがあふれ出し、友達とどんな部屋を作ろうか、どんな形にしようかと、考えを伝え合いながら、設計図が形になる時を楽しみに製作する様子が見られた。



じゃあ、いすとか
てえぶるとか かこうよ
これ、わたしの いすね

ねえ、ここはさ、
こはんたべるところにしない?

設計図から船の形にしていく過程では、客船を見た経験から、「みんなが入れる大きな船がいいよね」と、部屋いっぱいベニヤ板を広げた。船の形は「漁港の船もにつぼん丸も先がとんがってたね」と、友達と声をかけ合いながら作る姿が見られた。ただの船じゃおもしろくないと相談しながら、船の中に迷路や星空の部屋を作り、また10月に作った水族館も船につなげ、

思考力：問題発見解決力、創造力、応用力

実践力：自律的活動力、人間関係形成力


海をつくりたいという子どものつぶやきは、クラス全員が入れる水族館を作り上げた楽しさや達成感、自信の表れであり、体験を再現したい、また、より高度なものへ挑戦したいという気持ちの表れであり、「学習意欲」と捉えることができる。

話し合いの結果、船という共通の目的を子どもたちは持つ。保育者は子どもたちに船の設計図をつくることを提案する。これは、水族館製作のホワイトボードでのイメージの可視化という経験をふまえての提案である。

船の大きさについても5月に清水港でみた客船のイメージが子どもたちのなかにもあり、保育室全体を使うこ

ととなる。また、水族館では段ボール使用し、船ではベニヤ板を素材として使用する。手応えのある素材を使用することで、5歳児の学習意欲を一層引き出すことができたのではないだろうか。

船の形を考えたり、客船と同じように船の中を楽しんだり、水族館をつなげてみたりするなど園外保育での

<p>“ふじっこまる”という名前をつけた。ふじっこまるは、子どもにとって大変身近な存在で、毎日中に入っ ては、遊んだり修理をしたりして、秋から冬にかけて 存分に楽しんだ。</p> <p>ほら、みてよ！ こんなにおおきいから みんなで ねれるじゃん！</p> 	<p>知識が、長期間の遊びを支えているの ではないだろうか。つまり、子どもの 興味や関心に即した「基礎力」が「思 考力」や「実践力」の支えにもなって いるということである。</p> <p>ベニヤ板を並べて… ねえ、どっちか物を まえにしようか？</p> <p>もっと おおきくしないと！ よこか物を もっと ながく のばしてみてよ！</p> <p>うわ～！ おおきくなった！ せかいに いけるふねにしよう！</p>
<p>⑥由比の海って、いいな。(1月)</p> <p>みんなで作った水族館を劇づくりのときに使いた いと、大切にとっておいた。子どもたちは、3学期が 始まると早速それを使って遊び始めた。「お話は何に しようか？」保育者の投げかけに子どもたちは「うら しまたろう！」</p> <p>浦島太郎は浦島太郎でも、ストーリーは子どもたち のオリジナル。題名も“ゆいのうらしまたろう”とし て、カメや魚だけでなく、人魚や桜えびドーナツ屋が 登場し、由比の海が大好きなふじ組らしい、ほのぼの した劇となった。また、“われはうみのこ”の歌が大 のお気に入り、みんなで気持ちを合わせ歌詞の意味 も感じながら、のびのびと歌うことができたのは、や はり海に親しみをもっていた彼らだからこそだろう とを感じる。</p>	<p>思考力：問題発見解決力、創造力、応 用力</p> <p>実践力：自律的活動力、人間関係形成 力</p> <p>劇づくりは、一年間の生活のまとめ の意味が大きい。10月につくった水族 館のイメージから、子どもたちはオリ ジナルの劇を作り出していく。そこ には、生活のなかで経験してきた内容が 盛り込まれていく。</p> <p>「桜えびロケット」から始まり、活 動と活動の「つながり」、ストーリ 性を重視した ESD プロジェクトが展 開されたといつてよいだろう。</p>

3. 結語

日本の幼児教育の基礎を築いた倉橋惣三は、『幼稚園真諦』⁽¹²⁾のなかで、「生活を生活で生活へ」という言葉を多用し、「子供が真にそのさながらで生きて動いているところの生活をそのままにしておいて、そこへ幼稚園を順応させていくことは、なかなか容易ではないかもしれない。しかしそれがほんとうではありますまいか。少なくとも幼稚園の真諦は、そこをめざさなくてはならない」(p.23)と述べている。ユネスコスクール加盟以前より、対象園では、子

どもたちの地域での生活に焦点をあて、地域の教育的な資源を生かした教育を行ってきた。まさに、倉橋の述べる「子供の生活しているところへ教育をもって出かけ行く」(p.25)というイメージと重なる。本プロジェクトを可能にしたものは、保育者の子どもの実態を捉える感性、地域のよさを見抜き、生かす実践力、活動と活動のつながりを考える構成力によるものが大きい。また、子どもの興味や関心を最大限に生かした方向づけは、13名というクラスサイズも手伝ったのかもしれない。保育者の資質、クラスサイズについては、別な稿に譲ることとする。

幼児教育では、季節や地域の行事、園外保育など子どもの生活を重視した指導計画を立案し、実践している園が多いが、さらに、本プロジェクトでは、子どもたちの自由な発想を基盤にした「自己充実」→「充実指導」→「誘導」→「教導」という倉橋の「誘導保育」⁽¹³⁾という実践の過程をたどっており、活動や遊びの「つながり」が自然で、子どもたちの必要感に基づいた活動や遊び、そのなかでの学びの具体を示したものである。「生きている桜えび」との出会い、そして、「清水港での客船の見送り」、これらは、プロジェクトの導入として年間指導計画に位置づけられているものであり、その後の園内での活動や遊びを方向付けていくこととなる。また、適宜行われる由比漁港への散歩は、体験を重ねるごとに子どもたちの「桜えびの命」や「海への思い」をつなげ、高めていくこととなったのだろう。子どもたちと保育者とで生活を作り上げている現代の「誘導保育」の一つの具体といっても過言ではない。このようにESDのプロジェクトというまとまりから俯瞰することで、園外保育の意図や園内での活動や遊びの質の評価を比較的容易行うことができる。そこに、幼児教育におけるESDの意義の一つがある。

さらに、ESDの意義として、プロジェクトは、幼児教育の実践を小学校以上の実践と同じテーブルで語ることを可能とする点があげられる。幼小連携の具体的な内容に迫ることができるのではないだろうか。また、ESDの実践が保育者や保護者、地域の人々の意識改革につながるという点である。これらの意義については、本論では明らかにされていない。しかし、今後の幼児教育の質の向上には欠くことのできない視点であり、研究の課題であるとともに、ESDが幼児教育に寄与する可能性でもある。

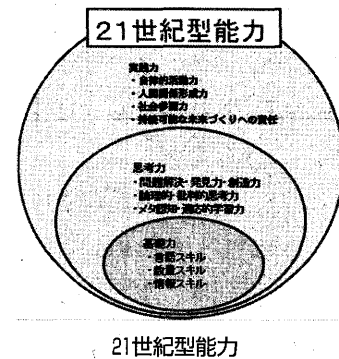
本プロジェクトを「21世紀型能力」の観点からみると、「基礎力」から「思考力」・「実践力」へ幼児期における学びが高まり、「価値の内面化」から「自立的活動（遊び）」へ変容していく過程を確認することができた。しかし、さらに詳細な子どもの言動の記録を分析することで、その内実が明らかになるだろう。また、アクティブ・ラーニングでは、五感を通しての活動が「価値の内面化」の大きな支えとなること、また、自由度や雰囲気も重要ことが、本プロジェクトから明らかになった。つまり、直接体験による教育効果は表面的、短期的には見えにくいですが、五感を通しての体験での感覚や記憶は後の学習に大きな影響を与えるものである。

注釈および引用・参考文献

(1) 例えば、小学校理科の目標は、「自然に親しみ、見通しをもって観察、実験などを行い、問題解決の能力と自然を愛する心情を育てるとともに、自然の事物・現象についての実感を伴った理解を図り、科学的な見方や考え方を養う。」中学校社会地理的分野の内容では、「地域の環境問題や環境保全の取組を中核として、それを産業や地域開発の動向、人々の生活などと関連付け、持続可能な社会の構築のためには地域における環境保全の取組が大切であることなどについて考える。」など

(2) 『教育課程の編成に関する基礎的研究報告書5 社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則』（勝野他, 3013）では、「21世紀型能力」とは、「『21世紀を生き抜く力をもった市民』としての日本人に求められる能力」であり、「思考力」、「基礎力」、「実践力」から構成されるし、右の図を示して説明している（p.26）。

<https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/Houkokusho-5.pdf>



(3) 梅澤収（2015）「21世紀型能力とESDをこれからの学校教育の軸に」（『2015年度中部東ブロックユネスコ大会in静岡』所収）

(4) 文部科学省ホームページ <http://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm>（2015年9月20日閲覧）

(5) 文部科学省（2008）『幼稚園教育要領解説』フレーベル館

(6) 幼稚園教育要領では、「ねらい」と「内容」を幼児の発達の側面から、5つの領域（「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」）を編成している。

(7) 同上。（5）

(8) ユネスコスクールホームページ http://www.unesco-school.jp/?page_id=19（2015年9月20日閲覧）

(9) 井上美智子（2008）自然とのかかわりの観点からみた現職保育者研修の実施実態。大阪大谷大学 教育福祉研究 第34号. 1-6

(10) 国立教育政策研究所ホームページ

http://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pf_pdf/20130627_4.pdf（2015年9月20日閲覧）

(11) 同上。（2）

(12) 本論では、1976年初版の『フレーベル新書10 幼稚園真諦』（フレーベル館）を引用した。

(13) 同上。（12）

謝辞

実践記録を快く提供していただいた静岡市立由比こども園 荒木明代園長と堀池志乃教諭に記して深謝したい。